

『弁天座、朝日座、角座……。そしてもう少し行くと、中座、浪花座と東より順に五座の、当時はゆっくり仰ぎ見てたのしんだ程看板が見られた訳だったが、浜子は角座の隣の果物屋の角を急に千日前の方へ折られて、……(中略)……やがて楽天地の建物が見えました。』織田作之助の「アドバルーン」の中の一節。戦前に落語家の息子である主人公が継母に連れられ道頓堀から千日前辺りの盛り場を徘徊する様子が描かれている。ミナミはこの様な歓楽街を先駆けとして街が切り開かれていった。

### ■道頓堀

そもそもミナミの道頓堀界限は1612年に安井道頓が秀吉の命を受け堀の開削に着手し、彼の大阪夏の陣での死後に従兄弟の安井九兵衛道卜が受け継ぎ1615年に完成させてから、その両岸がいわゆる難波新地として開発されたことに始まる。道頓堀川の北は島之内に含まれ、その相合橋筋の六軒町といわれた所に6軒の遊郭があった。最初の「ミナミ」とはこの島之内の遊里を指したらしい。また、大阪夏の陣後に大坂を治めた松平忠明から、荒地だった堀川沿いの開発も命じられた道卜が、賑わいを作るため芝居興行の許可を幕府から得て今の南船場にあった芝居小屋を道頓堀に移したのが始まりとなり、道頓堀の南が芝居街として繁栄する。道頓堀完成から150年後の1765年の大坂図(図1)には道頓堀に沿った吉左衛門通りに堺筋から西に「竹田」「トヨ」「角」「中」「竹」という文字が読める。当時道頓堀五座と言われた竹田座、豊座、角座、中座、竹本座である。出し物小屋や芝居茶屋も軒を連ね大変な賑わいを見せ、花街とあいまって一大歓楽街となった。当時、芝居や見せ物は一大娯楽で、船場の旦那衆や夫人たちが東横堀あたりから船で繰り出し、川岸の芝居茶屋で食事などをしてから芝居見物に出かけたのであった。

### ■日本橋筋界限

図1で千日墓と書かれた東側に日本橋から南に長く伸びた街区が見える。大坂から住吉、堺を経て紀州に至る紀州街道沿いである。万葉時代にはこの辺りまで海が入り込み、呉の国からの渡来人たちがここに着了いたので名呉の江などと呼ばれていたことから、この街区は名呉町と呼ばれていた。

後にそれが転じ「長町」なったようで、1872年に「日本橋筋」と改称された。紀州街道沿いは表で旅籠が軒を連ねたが、一方、近辺には諸国から来た肉体労働者や低所得層も多くたむろし、裏通りは木賃宿が密集する貧しい人たちの町になっていた。幕末には世情不安から多数の生活困窮者がこの町に流れ込み、スラム化は加速され大阪一の密集地となった。裏長屋は間口1間×奥行き一間半、三方は壁に囲まれ一方に明かり取りの窓と入口があるというのを一室とし、その多くが荒板にゴザを敷き家族6~7人が暮らすという状況であった。

明治時代に入り行政としてもこの状況を放置できず、折からのコレラ流行に端を發し1886年に大阪府は「長屋建築規制」をもって衛生上有害または危険な長屋の取り締まりを強化する。長町の長屋も450戸程度が撤去された。しかし問題解決には程遠く大々的に住民を移転させるスラムクリアランスが計画された。移転先は、当時は畑が広がっていた隣の難波村の西南端。この三万坪の土地に住宅・店舗・風呂屋・医院・授産所などを備えたコロニーを作り住民を転居させ、跡地を標準的な市街地にする計画だった。これは近代大阪最初の市街地改造の都市計画といえるが、膨大な事業費と移転先住民の反対により頓挫する。

近代都市の体裁を整えるべく、市街地の整備は急を要した。1872年に「社寺其他名区勝跡を公園と定むるの件」という太政官布告が出され、都市公園整備の基本方針が明確になる。これを受け、大阪府でも住吉公園と四天王寺公園が指定された。四天王寺公園と言っても四天王寺の境内がその用地とされており、四天王寺本坊は当然異を唱えた。また、芝居小屋等の改築や再整理も公衆衛生と都市防災の観点から施策となった。この様な状況下で1887年当時の大阪府知事であった建野郷三は天王寺茶臼山以西、日本橋の南の紀州街道以東、大阪鉄道(後に関西鉄道、現JR大和路線)以北の今宮村の地を都市公園として整備すること、また市中の興行場を整理し千日前に大興行場街を形成することを構想する。

更に1900年には、この地に第五回内国勸業博覧会を誘致することに成功し、「1903年に勸業博覧会を開催する」旨の勅

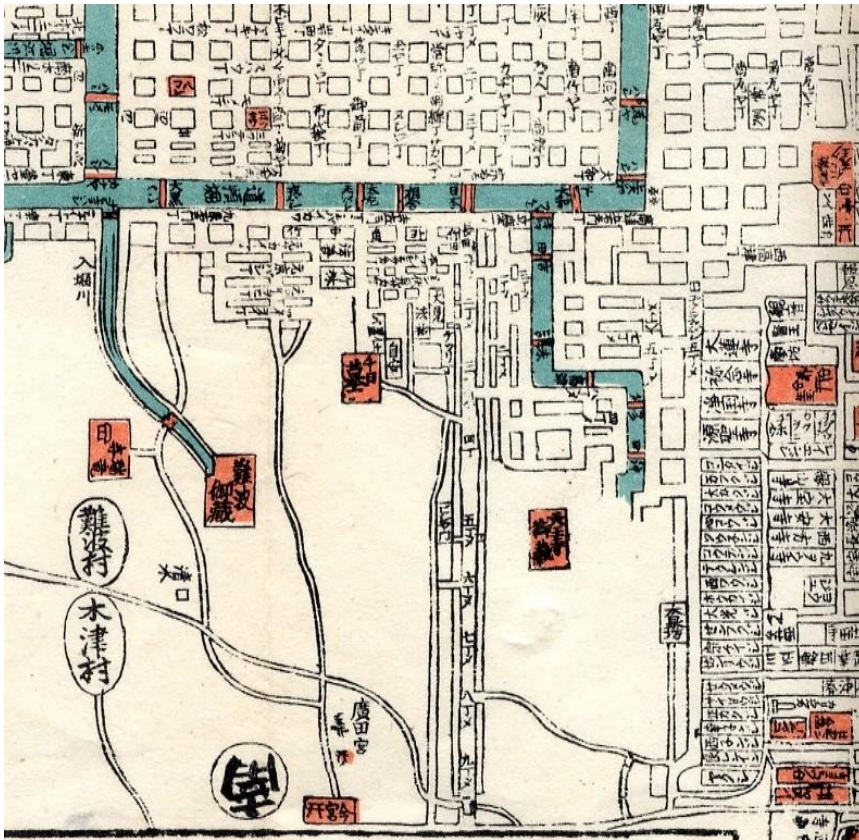
令が下りた。府はさっそく準備に入り、先ず手をつけたのが道路工事で、特に会場へのアプローチとしての長町の整備はもっとも重要な課題であった。市街地から博覧会場への道を整備するために、日本橋筋の両側に広がる迷路のような住宅密集地を撤去して住民を関西鉄道(現JR)以南に強制的に移動させ、跡地に広幅員の道路を一直線に通した。積年の課題としていた長町の不良住宅の撤去はここによりやく実現した。しかし、移転先の関西鉄道以南の地というのは現在の釜ヶ崎地区で、結局この地区が未だにかかえる問題の端緒をつくり、課題を転嫁したに過ぎなかった。

### ■内国勸業博覧会以前

明治時代に入り大阪の人口も増加、新たな市街地開発は施策としても必要であった。大阪の市街地南部にも近代化の過程で鉄道網が整備される。1885年:阪堺鉄道(現南海電鉄)難波~大和川間、1889年:大阪鉄道(現JR大和路線)湊町~柏原間が開通。この様な状況下で先の行政側の南大阪開発の目論見を察知した民間業者はこれらの鉄道網の発達を考慮に入れ、娯楽を中心とした開発を前述の公園用地内外で繰り広げる。

1888年に難波駅の南に「眺望閣」という木造5階建ての展望塔を中心とした遊園地「有宝地」が開園し、観光名所として1900年代初頭まで賑わったといわれている。余談となるが、ここに来る客を当て込み古道具の市が立ち、これらの露店は「五階昼店」と呼ばれた。これ等の店が現在日本橋にある「五階百貨店」のルーツと言われている。

また、1890年には「今宮臥龍館」という、移動型のローラー・コースターを中心とする遊技場も造られた。線路の形態が臥した龍に似ていることに因んで名づけられた。更に、1889年に一心寺の西、現在の新世界北入口付近の約1.6haの土地に、商業の盛隆を図るとする趣旨で「偕樂園商業倶楽部」という博覧会の前身に近いものができている。大規模な商業娯楽施設で、常設の内外物産品陳列所と洋館5階建ての(最上階は展望台)本部の他に、敷地の広さを利用し蒸気力や様々な機械類を説明する館等があった。加えて池をめぐる食堂や談話室、温泉、舞台、玉突き場等もあり一種のアミューズメントパークになっていて、誰でも入



明和4年増補大坂図

1



2



3



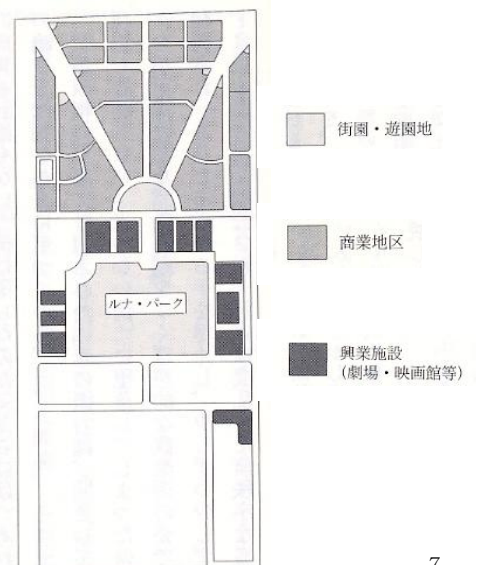
4



6



5



7

場料さえ払えば自由に入ることが出来た。

### ■内国勸業博覧会

前述した通り、この地での第五回内国勸業博覧会の開催が決まり、「偕楽園」はわずか12年で1901年に大阪市博覧会委員会に売却された。会場の敷地面積は約31ha余り。現在の天王寺公園・美術館・動物園と新世界とを含む広がりである。

内国勸業博覧会は、わが国の商工業発展と国際貿易振興を目的に政府主導で開催され、東京上野公園を皮切りに大阪で第五回目となる。1903年3月から5ヶ月間開催された大阪博覧会は国際万国博覧会誘致の最初のステップという意気込みもあり極めて充実していた。正面入口は高さ27mもある門で(図2参照)、場内に学術・美術から農業に至るまで種々のジャンルや米・英・仏・露・独など18ヶ国におよぶ諸外国の展示館もあった。娯楽施設も充実しており、ウォーターシュート、「不思議館」と称し幻想的な舞踏を電気仕掛けで演出したショーや、更にはまだ普及していない冷蔵庫の展示、冷房施設の実体験まで行われたという。夜は各展示館に電飾がつき夜景が演出された。530万余人が訪れ、最先端技術で開発された製品や様々な目新しい遊戯具・娯楽施設に目を奪われ、勸業博覧会は成功裏に幕を閉じた。

### ■会場跡地利用と新世界

博覧会会場跡地は、議論の末に東側を都市公園として整備し、西側を「公園不用地」として民間に売却することになった。売却益を都市整備の原資とする思惑も見え隠れするが、地価上昇に伴う周辺の市街地化促進も念頭に置かれ、西隣には阪堺電軌の堺まで伸びる阪堺線のターミナルが計画されていたので(1911年恵美須町〜堺市大小路間開通)、「公」による健全娯楽の充足と、「民」による大衆娯楽を用いたターミナル周辺開発という役割分担と考えられる。博覧会の後、日露戦争(1904〜07年)により開発は中断するが、1909年に東側の天王寺公園が開園した。その後動物園が1915年に開園、美術館も1936年に開館し次第に充実が図られた。

一方、「公園不用地」は戦後の財政好転も手早い売却から賃貸に切り替わり、1911年には土地を一括借用する大阪土地建物株

が大阪財界あげて設立された。同社に土地が移管され、いよいよ街の建設が行われることになる。建物の建設は大林組が一括請負を申し出た。新しい建物群の設計は、設楽貞雄<sup>4</sup>が大阪土地建物株の顧問に就任し、マスターアーキテクトを努めた。実績を買われたのであろう。

街のマスタープランは、中央に通天閣というエッフェル塔を模したタワーを置き、そこから北半分はパリ風に放射状に道路が伸びる商業街区が、南側はルナパークというニューヨークはコニーアイランドの遊園地を模したアメニティーパークが配されて、その周囲を興行街が取り囲む配置であった(図7参照)。

一方、1912年が明けて間もなく千日前辺りから南の地域に大火災がおり21ヶ町を焼き尽くした。この時、ようやく興行場の集積を見ていた千日前に対し、新世界が興行場立地で優位に立ったのであった。

通天閣(図3参照)は凱旋門を思わせる基壇の上に鉄の展望塔が建っている。高さは75mとされているが、諸説があり定かではない。凱旋門風というのは、その北の街区も含めパリに範を取った洋風の街並みをつくるというコンセプトを増幅する。基壇部分に外部から見えるアーチ状の通路の内部は30m四方の交差ボルトの天井を持ち、花卉と孔雀が描かれていたという。また、この基壇上部のルーフガーデンとルナパークの象徴であるホワイトタワー中腹部とはロープウェイで連絡され、園地の上を空中遊覧しながら移動することができた。それは周辺の街並みとは隔絶され、更には普段の生活ともかけ離れた異次元の空間体験を提供する。その他の施設に関しては、門や興行場の写真が数葉残っている。これらは様式を明確にすることは困難だがルネサンス風を東洋的に翻案したものが多く様だ。

また、ルナパーク周辺は興行ゾーンと位置づけられており、ルナパークの南に1919年に新世界国技館が落成した(図6参照)。設計は木子七郎<sup>5</sup>。501坪(1,656平方メートル)、収容人員10,000(一説に7000人ともわれている)。「ばわあえんじえる-Introduction」という武双山関に関するWebページにこの建物の当初スケッチと言われるものが掲載されている。それが確か

にこの建物の当初スケッチであるということを確認したわけではないので確信を持っていないのが残念だが、それを見ると両国国技館に似ており、円形平面で4周に階段とEVシャフトが対になったものが付き本体と同程度の高さを持つドーム状の大屋根を載せたものである。竣工した建物は方形平面で屋根の高さもずいぶん低いものになっている。スケッチ案のまま実現していたらよかったのと思う。ここでは相撲以外にも、菊人形などの催し物が行われたが、1937年に旭区関目に大阪大國技館が建設され、国技館としての役目を終えた。その後は松映という映画館になり1945年の大空襲で焼失したようである。

### ■千日前

図1には中座の南に「法善」「竹林」とあり現存のそれら二寺と知れ、その南には「仕置バ」「千日墓」の書き込みが見える。現在でもそうだが、墓地は汚れた存在として都市の外縁に追いやられる。ここは江戸時代には罪人の刑場と大坂七墓場の一つがあった場末であった。この二寺では刑死者や被葬者の霊を慰めるため千日回向を行っていた千日寺とも言われたため、その前面の地が「千日前」と呼ばれることになった。

明治時代になり1870年にはこれらの墓地なども阿倍野へ移され(阿倍野斎場)刑場も廃止された。その跡地の繁栄策として見世物小屋などを誘致したが、最初は夜店を出す者もない状態であったようだ。1883〜84年頃には見世物小屋も数が増えて次第に賑わいが出てきた。1900年代初頭には初めて活動写真館が出来て客を呼んだ。

しかし、千日前がその街の佇まいを一新したのは、1912年1月16日のミナミの大火により一帯が焼失した後で、火災後に千日前筋が拡幅され、市電が通じ交通の便も格段によくなってからのことである。付言すると、この火災により道頓堀周辺より移転を迫られた貸し座席業者が移転先として選んだのが阿倍野斎条北側の低地の飛田であった。飛田新地遊郭街の端緒である(遊郭開業1918年)。

### ■楽天地

その千日前の焼跡に1914年(大正3年)に「千日前楽天地」(図4参照)と称し劇場、演芸場や遊戯施設などを含む建物群が、南

海鉄道の系列会社で後に松竹により買収されその傍系企業となる千日土地㈱によって建てられた。「アドバルーン」に出てくる「楽天地」である。約 4400 m<sup>2</sup>の敷地に大衆娯楽を目指した劇場や映画館・子供館などがあり、中に入れば一日ゆっくり遊ぶことができたという。大正期の大阪における大アミューズメントパークであり、新世界の競合相手でもあった。設計は設楽貞雄、レンガ造と木造で施工は松村組であった。

この建物は実に奇妙な外観をしている。当時の写真で見ると大きな丸屋根が中央に聳えて、その周囲をぐるぐる廻りながら上って行くと、屋上では四方が展望出来るようになっていた。更に様式的には非常に不明快で無国籍なものに見える。楕円形の窓が多用されている点や屋根窓まわりの飾りなどはバロックを意識したのであろうか。しかし正面の二本の尖塔の屋根に関して言うと、尖頭型ドームの水平断面形を四辺形にしているところなどは、なかなか独自性がある。大衆娯楽の殿堂として人目を引くには十分な意匠の複合性と奇抜さを持っている。しかし、経営的には長持ちせず、1930年に閉鎖されてしまった。

### ■大阪歌舞伎座

千日土地㈱はその跡地に 1932 年に大林組の設計施工で大阪歌舞伎座 (図 5 参照) を開設した。地上 7 階建地下 1 階のビルの 1~4 階を占め 3000 人を収容する大規模なもので、東京のそれよりも設備的にも充実し関西歌舞伎の殿堂と言われた。翌年には 6 階にアイススケート場が併設され、飲食も含め歌舞伎以外の娯楽性も兼ね備えた。この建物は前身の楽天地とは異なり、ゼセッション風の外観を持ち、日本橋交差点に面する大きな円形窓が印象的なのと、コーナー部の縦シャフトに設けられたコーナーウィンドウが小洒落ている。しかし戦後は関西歌舞伎が衰退し、大阪歌舞伎座が難波駅前(新歌舞伎座)へ縮小移転してしまっただけで、歌舞伎劇場は 1958 年 4 月に閉鎖され、建物は千日デパートとして改装された。B1 階~5 階まで商業施設、6 階は演芸場の千日劇場、7 階はキャバレー、屋上には遊戯施設を持つという内容を誇るショッピングセンターであった。本邦初の屋上観覧車は大阪名物となった。やはりその立地

上娯楽性・娯楽性を大きな売り物にしていた。1972 年に大火災を起こしてしばらく放置されたままだったが、1983 年によく解体された。その後ダイエー系のプラント難波が建設され現在はビッグカメラとなっている。

### ■難波御蔵

今一度、図 1 に戻ると西横堀から道頓堀を越え南に伸びる入堀川の行き着くところに「難波御蔵」が見える。これは 1732 年に南西諸国に起こったイナゴによる穀物被害で穀物価格が高騰したため、幕府は米の供出で窮民を助け職を与えて自活させようとした。そこでこの年、難波の地に米蔵を建設し米蔵への搬送ルートとして道頓堀から運河を開削し今で言う公共工事で労働需要を創出した。運河の端には船着き場を設け米蔵と直結させた。これが難波新川で、現在難波高島屋の西から北西方向に伸びる高速道路のルートである。この難波御蔵は明治後半まで大蔵省管轄の米蔵であったが、都市工業が興隆してきた時代で 1898 年に専売局の煙草工場となり、戦後は 1950 年にこの地に大阪球場が建設され野球という庶民娯楽の大きな部分を担った。

### ■歓楽街とミナミの市街地形成

江戸時代からかそれ以前からかは判らないが、掘割の開削や湿地・港湾の埋め立てなどによって開発された新市街地は「新地」と呼ばれ、開発者は茶屋株や芝居株という営業権を与えられ茶屋や遊郭あるいは興行場の営業が許された。それはこれらの歓楽街・盛り場が新規市街地を人が活用し、収益を上げる用途として確実であったからと考えられる。市街の外縁部即ち難波新地・高津新地・日本橋筋(長町)木賃宿地区・千日前と言う様な周縁の空間に、芝居、茶屋、刑場・墓場などの非日常空間が配置され、ミナミはそうした場の集積地であった。

新世界も開発当初こそ大資本による「模範的娯楽場」の一体開発に見えたが、時代の推移とともにその理想が色あせる。先ず 1912 年の一期工事完成直後に明治天皇が崩御され娯楽への足が遠のく。二期工事の完成後も街は寂れる一方で、当初コンセプトを捨ててまで洋の街に和の要素を取り込み集客に努めるが、はかばかしくなかった。1915 年の大正天皇即位の祝賀ムードが不

景気を払拭するが、起死回生は「模範的娯楽場」という看板をかなぐり捨てた貸座敷と町芸妓の導入である。街は花柳街と見まがう様相を呈する。新世界の直ぐ南に 1916 年に開業された公許の遊郭街である「飛田新地」もこれに拍車をかけた。その後も恐慌などの波にもまれるが、動物園に近い辺りに「待合ホテル」街ができ風俗的色彩の濃い街へと傾斜が強まる。第二次世界大戦中の 1943 年にはシンボルであった通天閣が炎上し街のシンボルを失い、更に 1945 年の大阪大空襲により街全体が灰燼に帰す。

戦後は復興に努め、映画ブームのころは各配給元の映画館などが軒を連ね娯楽街としてよみがえったかに見えた。しかし、一方では戦後の建設ブームの陰で建設労働者が釜ヶ崎に集まり、彼らを含めた一般庶民に安い商品・飲食・娯楽・慰安等を提供する店が集合するようになり、陽が当たることは少なかった様に見える。

言い換えれば、ミナミはその様な庶民のいわば下世話なエネルギーを吸収しつつ、市街地が展開されたとも言える。

しかし、例えば新世界に当初建設されたいわゆる「パリ風の街並み」が今も残っていれば、これはこれで大阪の大きな建築的歴史遺産となり、また、新世界が観光の一つの目玉となり得たかも知れず、残念に思うのは私一人ではないだろう。

### 参考資料：

- ・橋爪紳也著「大阪モダン ― 通天閣と新世界」
- ・織田作之助著「夫婦善哉」(新潮文庫)
- ・「そぞろ歩き―千日前道具屋筋」日本経済新聞 2000 年 10 月 20 日(夕)
- ・小田康徳著「明治前期の難波村」(「大阪の歴史」第 61 号所収)
- ・伊藤純著「森琴石と歩くおおさかの町―難波御蔵」大阪日日新聞 2003 年 5 月 15 日
- ・「新世界へようこそ」(新世界商店会連合会 協議会ホームページ)
- ・「大阪に住もう」(都市機構 Web ページ)
- ・「でんきのまち大阪日本橋物語」(でんでんタウン協栄会ホームページ)

図版リスト

1. 明和4年増補大坂図（部分、大坪蔵）
2. 第5回内国勸業博覧会ゲート（出典：大阪市立図書館イメージ情報データベース）
3. 初代通天閣（出典：同上）
4. 千日前楽天地（出典：同上）
5. 千日前歌舞伎座（出典：同上）
6. 新世界国技館（出典：同上）
7. 新世界の配置図（開業時）（出典：橋爪信也「大阪モダン・通天閣と新世界」朝日座（同上）

- \* 1：設楽貞夫＝山口半六に師事。その後山陽鉄道を経て独立。商業建築や事務所建築を多く手がけた。
- \* 2：木子七郎＝1889年～1995年。1911年東京帝国大学卒業後大林組に入社。1913年独立し事務所開設。日本赤十字大阪支部病院・愛媛県庁などを手がける。
- \* 3：両国国技館＝辰野金吾・葛西万司設計。1912年完成。

ミナミに関する略年表		
西暦	年号	出来事
1615	元和1年	道頓堀完成
1868	明治1年	五箇条のご誓文
1870	明治3年	千日前刑場廃止、千日墓地・火葬場阿倍野へ移転
1874～77	明治7～10年	官営鉄道 東海道線神戸—京都間開通
1885	明治18年	阪堺鉄道 難波～大和川間開通
1886	明治19年	コレラ大流行
1889	明治22年	大阪鉄道 湊町～柏原間開通
1894	明治27年	日清戦争
1903	明治36年	第5回内国勸業博覧会開催
1904	明治37年	日露戦争
1908	明治41年	大阪市電 梅田～恵比寿町開通
1909	明治42年	同上 恵比寿町～天王寺西門間開通、天王寺公園開園
1911	明治44年	阪堺電気軌道 恵比寿町～堺間開通
1912	明治45年	ミナミの大火、新世界第1期開業
1914	大正3年	第一次世界大戦
1915	大正4年	天王寺動物園開園
1918	大正7年	第一次世界大戦終結、飛田遊郭開業
1919	大正8年	新世界国技館落成
1923	大正12年	ルナパーク閉園
1927	昭和2年	金融恐慌
1931	昭和6年	満州事変
1933～35	昭和8～10年	地下鉄御堂筋線梅田～難波間開通
1936	昭和11年	天王寺美術館開館
1937	昭和12年	日華事変、御堂筋開通
1941	昭和16年	第二次世界大戦
1943	昭和18年	通天閣炎上・解体撤去
1945	昭和20年	第二次世界大戦終戦